

日 本 の 点 字

第 38 号

目 次

思い出は点字とともに	当山 啓	1
特集「小林一弘さんを偲んで」		10
小林一弘前副会長の死を悼む	木塚 泰弘	12
小林一弘先生のこと	塩谷 治	16
家の顔	小林 秀之	20
10周年を迎えた日本点字技能師協会に思う	中山 敬	23
点字を指で読む人、目で読む人を増やしたい ～日本点字普及協会の取り組み～	藤野 克己	28
“World Braille Usage”（世界点字便覧）に日本語点字は どのように紹介されてきたか	金子 昭	32
『闇を照らす六つの星 — 日本点字の父石川倉次』の紹介		42
日本点字委員会第49回総会並びに研究協議会報告		44
編集後記		46

2014年2月

日 本 点 字 委 員 会

思い出は点字とともに

日本点字委員会事務局長 とうやま ひらく
当山 啓

点字との出会い

点字の五十音や数字を読めるようになったのは、高校3年生ごろ、ざっと半世紀前のことになる。ろくでもない動機からである。私が入学したのは愛知県立豊橋東高校だが、1年生から水泳部に所属していた。25mも泳げないのに入部してしまったのだから、ここからしておかしな奴だったと今にして思う。自由形だったのに、平泳ぎにも勝てずいつもビリだった。その高校には、「あゆみの会」というボランティアサークル（学校から公認されたクラブではない同好会）があった。そこに中学からの初恋の人が入っていた。彼女と少しでも近づきたいため、水泳部に所属していたにもかかわらず（彼女も運動部にも所属していた）、2年のいつごろだったかははっきりしないが入会した。しかも、そのサークルには男子がいなかったため、さすがに一人で入るのはためらわれ、中学時代からの親友を強引に巻き込み、入会した。

水泳部と「あゆみの会」という二足のわらじを履くことになったわけだが、「あゆみの会」の活動は、主に休日だったので、まずバッチィングすることはなかった。それに不純のような動機の後ろめたさのため、むしろ積極的に活動しようと努めた。そんな活動の中で、愛知県立豊橋盲学校（今は閉校）のクリスマス会に「あゆみの会」が招かれた。私も参加したのだが、そのとき、点字で書かれたクリスマスカードを手渡されたのが点字との出会いだった。「クリスマスおめでとう」と書いてあると聞いて、6点すべて打ってあるのが「メ」だと気づいたことを覚えている。

活動の一つに、「豊橋ともしび会」の点字カレンダーの印刷があった。その点字カレンダーは、1961(昭和36)年以来、同会が作製していて、今も全国に無償配布しているものである。「豊橋ともしび会館」は、母校のすぐ近くにあり、放課後、時間がある者が行って作業することになっていた。母校のプールは温水プールではなかったもので、シーズンが終わるとサーキットトレーニングをしていた。それは主に屋外で行っていたから、雨が降ると中止になることもある。そんなときに、同会館に行って、点字印刷をした。たまたまスケジュールが合い、前述の彼女とペアになって、おしゃべりしながら点字印刷するときなど、この上ないような喜びを感じたものだ。それはさておき、現在のように点字出版を仕事とするようになって、いかにひどい印刷をして

いたかがわかってみると思わずぞっとしてしまう。じきに点が薄くなってしまふのだ。同会館には、日本点字図書館（日点）発行の『点訳のしおり』が置いてあり、たぶん販売もしていた。それを買ったかもらったかは定かではないが、入手した。薄くなって触読には適さない点字を何が書いてあるか知りたくなって、持ち帰って、『点訳のしおり』と首っ引きで墨字訳した。それで初歩的な点字は一往は読めるようになった。

教師を志す

私の高校は、部活動にも重きを置いてはいたが、進学校でもあった。私は団塊の世代の初期に属していたから、いわゆる受験戦争が激化したころである。受験戦争に反発を感じていたし、別に一流大学に入りたいという意識もなかった。勉強は定期試験の前日の一夜漬けで概ね間に合わせていた。小学・中学のころは、田舎でもあるし、人数も少なかったから、けっこう優等生（良い意味ではない）だった。それが、水泳部のハードな練習や友達と遊ぶ機会が多く（すぐに環境のせいにしてしまふのだが）、成績はみるみる下がった。ただし、水泳で鍛えられたおかげで、体育の成績だけは、小・中のころとはほぼ反対によくなった。自宅でも受験勉強から逃げ出たく、もっぱら読書にいそしむようになった。考えてみれば、そのころの点字と読書が今の私の基礎になっているようだ。

劣等生になったのが気楽でもあったが、中学校のころからひどい反抗期が始まっていて、特に母親との仲は険悪になり、精神的にすさんでいて、見つかったら少なくとも停学か謹慎を食らっているようなことをしてもいた。そんな私を救ってくれたのが、2年・3年の担任だったいかだつ筏津先生だった。その恩師の影響で、教師を志すようになった。私の学力では公立はまず無理で、小学校教員免許を取得できる私立は、当時、たぶん玉川大学しかなかったと思う。私の父は職業軍人だったが、敗戦とともに農業をするようになった。豊橋市にあった陸軍演習地を開墾して畑にするための土地に集団入植したらしい。しかし、農業の経験のない父が利益を上げるのはまず無理で、軍人恩給が支給されなかったとしたらどうなっていたことか。世の中全体が裕福ではなかった時代だから、私としてはあまり貧乏を感じなく育ったのではあるが。

閑話休題。玉川大学文学部教育学科の入学試験は、当時〇×式が主流の中で、記述式が基本だった。そのおかげで合格できた。貧乏だったのに、金のかかる私立大学へ行きたいという私の希望を両親はよく叶えてくれたことと思う。畑を売るなどして、入学金や授業料、生活費を賄ってくれた。入学したころは、教師になる情熱にあふれ

ていて、僻地教育研究部（僻研）に入った。しかも、体育会系だった私としては運動部にも所属したくサッカー部にも入った。またしても二足のわらじ。ただ両立できるほど甘くはなかった。半年ほどで、サッカー部をやめざるを得なくなった。僻研ではかなり熱心に活動していた。夏には2週間ほど現地調査と称して、山形や下北などの僻地に行った。現地調査の家庭訪問の際に、子供の親から酒やタバコを勧められ（またしても人のせいにする）、それ以後常習化し、今に至っている。

ところが、徐々にその部の雰囲気私の性格に合わなくなるのを感じ始めた。以前から私の友人は、真面目そうで不真面目か、不真面目そうで真面目な奴ばかりだったせいか、あまりにも生真面目な雰囲気になじめないようになってしまった。酒もタバコもやらない同期生が主流になったのが気に入らなかつただけかもしれない。また、現地調査の中で、教育の現場の息苦しさを聞いたこともある。2年の終わりに退部してしまった。それとともに、私の性格はどうも教師に向かないらしいことを自覚するようになった。

点字事始め

肝心の点字についてだが、大学に入って落ち着いてきたころ、せっかく一往は読めるようにはなつたのだから、書けるようにもなりたいたと、『点訳のしおり』に日点で通信教育をしていることが載っていたため応募した。今と違って、それを受けるための試験もなく、すぐに資料が送られてきた。それを2週間に1度くらいのペースで、送っていた。書き方練習の第1回は、間違いだらけで再提出を求められたことはよく覚えている。1年くらいで規定問題が終わって、自分で墨字文章を選んで点訳するという自由題練習があった。主に私の好きな文学関係から点訳しやすい文章を選んでいたためもあって、自由題練習の10回目くらいで、「練習総まとめ問題」が送られてきて意気揚々と提出した。その結果は惨憺たるもので、自由題練習をまた続けることになった。その後、数回の練習を経て、1967(昭和42)年の夏ごろついに卒業した。日点に就職してからわかったことだが、そのころ点字指導担当者が変わったばかりで、張り切って点訳者を増やそうとしていた時期だった。私の練習期間は、タイミングがよかったわけだ。

点訳書第1冊目は、一色次郎著『青幻記』だった。もちろん、点字盤による手書きである。全3冊を半年くらいかかって点訳した。これもものちになってわかったことだが、『青幻記』は、程なく厚生省委託書として製作されたから、私の点訳書は、蔵書

となることはなかっただろう。

教師になる意思はなくなったのだが、学資を出してくれた親の手前もあって、中学・高校社会科の教員免許は取得しようとした。専門課程の3・4年生になると、小学校教員課程に比べて必要単位数はかなり少なく、部活もなくなったため、時間的に余裕ができた。それで、昼間、授業のない時間は、アルバイトに精を出し、夜はもっぱら読書（学業に直接関係のない文学関係がほとんどだった）と点訳に打ち込むようになった。

日点に就職

4年生になって、就職のことを真剣に考えねばならなくなった（3年生の冬に父が事故が元で亡くなったこともある）。企業に勤めるのは気が向かなかった。さりとて、公務員にも何の魅力もなかった。だいいち、公務員試験に受かりそうもないし、そのための勉強をする気にもなれなかった。そこで、はたと考えついたのが日点だった。公共図書館は就職の選択肢には入っていなかった。本が大好きだったのにもかかわらず、選択科目の図書館司書の講座が1時限目で、多少の早起きをするのがいやだったというだけで取らなかった。ただし、点字図書館にはとても興味があった。ともかくも職員募集があるかどうかを聞きたく、点訳書が仕上がったのを機に日点に行った。夏休みが終わって間もないころだったと思う。点訳指導係担当の宇野幸子^{ゆきこ}さんに就職できる可能性を尋ねてみた。すると、すぐに本間一夫館長（当時）に会わせてくれた。本間先生は、まず「点字毎日」を手渡して、読んでみなさいとおっしゃった。裏読みしかできなかったし、インターポイントの点字は目では読みづらく、たどたどしく読んだ。そのときの記事に「スミジ」とあって、その言葉を知らずに、詰まってしまったのだが、すぐ本間先生が説明してくださったのを明瞭に覚えている。就職については、即答はなさらなかったが、加藤善徳^{よしのり}理事を紹介してくださり、加藤理事自らが館内を案内してくださった。そのとき、もっとも印象深かったのは、点字出版だった。点字印刷は高校時代に曲がりなりにも経験していたが、点字製版機を見るのは初めてだった。加藤理事に、このような仕事に興味はあるかと聞かれて、「本が好きだからとても興味深いです」と答えたのをうっすらと覚えている。就職については追って連絡すると言われた。今と違って、就職試験がなかった時代であるが、面接試験を兼ねていたのかもしれない。

連絡があるのを待っていたのだが、秋が深まっても音沙汰がない。さすがに焦りを

覚えて電話した。すると、本間先生と加藤理事は、海外出張しているから採用するかどうかわからない、帰国してから改めて連絡してほしい、ということだった。一日千秋の思いで、帰国されて間もないころに加藤理事に電話した。すると、採用することになっているから、4月においでなさいとのこと。心の底から安堵したものだ。

1970(昭和45)年4月1日に初出勤した。加藤理事に館内案内をしていただいたときの会話で、点字製版の係になるだろうと思い込んでいた。ところがである、加藤理事の下の庶務係に私の席があった。苦手な事務関係の仕事が勤まるだろうかという不安を覚えたものだ。しかも専任の庶務係は私一人である。

当時の庶務は、現在と違って忙しくはなかった。福祉関係の図書を読むことすら仕事の一部だった。ともかくも日点の雰囲気になじもうとした。これも今と違って研修期間はなく、各部署の仕事を研修する機会もなかった。そのせいもあり、庶務の仕事の一環と割り切って、図々しくも忙しい部署の手伝いに行ったりもしていた。用具の責任者である花島^{はなしま}弘氏が庶務を兼任しており、厚生省(当時)や東京都の外回りを受け持っていて、同行するようにもなった。1年くらいしてから、加藤理事が担当していた公的委託費関係の事務の一部を引き継ぐようにもなった。その一つに、報告書作成があった。パソコンはもちろん、専用ワープロもない時代で、複写用にカーボンを挟んでの手書きである。しかも生来の悪筆だから、なるたけゆっくりと丁寧に書くように努めた。最後のほうになって間違えて一から書き直しとなると泣きたくなった。手書きの字は別として、加藤理事は、盲人福祉全般にわたること、事務関係のことなど、懇切丁寧に教えてくださった。

私の入った年の秋に、資金獲得の新たな手段として、チャリティ映画会を開催することになった。本間先生の本領発揮である。切符の購入の勧誘のために本間先生自ら多くの団体・企業を回った。そのときの手引きの多くは私だった。本間先生が相手の懐に入る人柄ゆえのうまさも感じた。その日のノルマを果たすと、夏だったから「当山君、氷でも飲もうか」と日点に戻る前に氷をおごっていただいたことも度々だった。そのときにしてくださる雑談は、多岐にわたり示唆に富むものだった。

帰宅して夜が更けてから点訳をした。ライトブレーター(カニタイプ)も購入し、それに慣れるようになると、もう点字盤には戻れなかった。当時、朝日新聞朝刊に連載していた三浦綾子著『続氷点』の連載1回分をほとんどその日のうちに点訳した(このころはあまり酒を飲まなかった)。これも今と違って、読みなどの疑問点は、点訳者が直接著者に尋ねてもよかった。疑問点をまとめて、三浦綾子さんに手紙を出した。

程なく、その回答が返ってきた。「体調の優れない綾子に代わって代筆することをお許してください」というような内容の書き出しで、夫である三浦光世^{みつよ}氏直筆の丁寧な返信だった。とてもとても感激したことを覚えている。

点字出版部に異動

庶務の仕事が私には向かないと、3年目くらいから毎年の異動希望調査に、点字貸出か点字出版と書いて提出していた。いよいよ持たなくなってきた、あと1年希望が受け入れられなかったら、他の出版施設に移ろうと思いはじめていた（庶務にいたから他の出版施設の人たちとも知り合いになれたわけなのだが）。5年目の秋ごろだっただろうか、点字製版係が年末に辞めることになり、その後任として私が異動することになった。しかも本間先生直々に、「あなたの希望を叶えられるようになった」とおっしゃってくださった。もう有頂天になった。点字は裏打ちしかできなかったので（表読みはできていた）、表打ちしかできない点字製版機に慣れるために、休み時間になるとパーキンスブレーラーで練習した。そうして、庶務係を5年9か月経験したのちの1976(昭和51)年1月に点字出版部に異動した。私を手取り足取り指導してくださった加藤理事は現役を退いておられたから、教わったことを活かさないという申し訳なさを感じないで済んだ。

それ以後、水を得た魚のような楽しい日々になった。このころには、しょっちゅう酒を飲むようになっていたからだろう、ある人が「酒を得た当山^{きよお}のよう」と形容していた。当時の丹羽清雄^{きよお}点字出版部長が点字製版機をはじめ、点字のノウハウも指導してくださった。丹羽部長は、点字出版業界で優秀な製版士として高名だったが、そのときの点字出版部全体の仕事バランスを取るためもあって、印刷を主とするようになった。丹羽部長が使っていた足踏み式点字製版機とアメリカン・プリンティングハウス製の電動点字製版機を私が引き継いだ。優秀な製版士の後任という形になって、多少は(?)プレッシャーを感じた。校正が返ってくるとあまりの間違いの多さに辟易した。思い込みによる間違いの怖さを特に感じた。漢字の読みや分かち書きのわからないものは、当然調べたり聞いたりするのだが、思い込んでいる場合はそれをせずに、校正の赤が入って間違いにやっと気づくわけである。点字部長の下沢^{まさし}仁^{まさし}理事（日点委の事務局長でもあった）から多くのことを学び、不躰な私の質問にも丁寧にお答えくださった。始めの何年かは、間違いをいちいちノートに書き出していたものだが、日常業務が忙しくなると時間的にそんな余裕がなくなった。当時の岩上義則^{いわかみよしのり}製版係主

任から、「単行本1巻の誤りが10箇所以下だったら飲み放題でおごろう」という話が出た。それから何年後だっただろうか、やさしい図書で、間違いが確か10数箇所だったことがあった。「惜しくも10箇所は切れませんでした」と岩上主任に一往は報告すると、「それも記念だ。約束を実行しよう」と基準を下げたおごってくださったことも思い出の一つだ。

その後、パソコンが導入されるようになって、作業環境は劇的に変化したが、パソコンで入力するようになって、むしろ間違いは多くなったようだ。パソコン上での修正が楽になって、読み返しがおろそかになっているかもしれない。校正担当者もレイアウトなどの大幅な修正指摘がしやすくなったことは、長所と考えるべきだろう。インターネットの活用によってかなり調べがつくようになったことは何よりも望ましい。特に、固有名詞の読みは一筋縄ではいかないことは確かだが、まずは検索してみるようになった。

パソコン点訳と関係はないが、恥を感じてしまう間違いは枚挙にいとまがない。今も覚えていることの例を挙げる。「里帰り」を「アサガエリ」と点訳したのには、校正担当者が「当山さんの願望が出たのだろう」と爆笑したそう。また、比較的最近のことだが、「フィギュアスケート」を「フィギアスケート」としてしまったことも思い出す。「フィギュア」とうまく発音できないせいか、「フィギア」と耳に入ってしまうらしい。墨字で「フィギュア」と書いてあるにもかかわらず、何箇所も出てきたのに、すべて「フィギア」としてしまった。「フィギュア」は人形のことで、スケートは「フィギア」だと思い込んでいた。校正が返ってきて、やっと間違いに気づいた次第である。また、連濁も三河出身のせいなのかどうか、判断がつかないものが多い。例えば「^か河川敷」は「カセンジキ」と思い込んでいたものだ。これなどは国語辞典を引いてみればわかることだが、載っていない複合名詞が連濁になるかどうかなどお手上げである。文章の抜けもよくある。「抜けの当山」と言われたものだ。とにもかくにも、校正の、特に触読校正の重要性を認識せざるを得ないというのが、40年以上仕事として点字を打ち続けてきた私の結論になる。いまだに漢字の読みも分かち書きも迷うことが多い。そんなとき、「人は努めている間は迷うにきまつたものだからな」（ゲーテ著、森鷗外訳『ファウスト』「天上の序曲」から）という言葉の思い浮かべてせめてもの慰めにしている。

自動点字製版機「ブレイルシャトル」の開発経過については、概略ながらも前号の「硬軟併せ持った直居鉄先生の思い出」に書いたので、繰り返さない。日点では現在

3台のブレイルシャトルが稼働しているが、3台がそれぞれ異なったソフトで動いている。そのうちの1台は、何といまだに8ビットパソコンで動いている。ブレイルシャトル開発の始めに、芝浦工業大学の入江正俊^{まさとし}先生が開発したソフトによってである。このソフトでは、行間・マス間が80分の1mm単位で変えられる。世界中で8ビットマシンが現役で活躍しているのは、希有な例だろう。ブレイルシャトル開発過程で関わったからパソコンに無知な私でも、「門前の小僧」の例で、このプログラムについてはある程度わかり、行間・マス間の変更程度のことにはできるようになった。また、ブレイルシャトル本体の簡単な故障なら修理できるようにもなった（メーカーの小林鉄工所に電話で尋ねながらのこともよくあるが）。故障の原因がはっきりわかって、直せたときは喜びを感じる。

その後のパソコンの日進月歩ぶりは驚異的で、今のパソコンソフトは、私にはブラックボックスになってしまった。進歩した点訳ソフトの恩恵にあずかって、その機能を何とか使いこなそうとしているのが現状である。今は、日点職員の中で、ウインドウズを使いこなせていない者としては、下から数えたほうが早いだろう。

日点委との関わり

話は遡るが、丹羽部長は1971(昭和46)年から日点委の事務局担当委員になっていた。そのポストも私に引き継ぐように言われた。そうして、関東地区の集まりに出席するようになり、第9回日点委総会(1976年8月)で私とそのポストに正式に任命された。日点委に関わるようになって、分ち書きや表記符号の使い方などかなり幅のあることがわかった。また、学校時代に習ったかどうか覚えがない、補助用言とか転成名詞とかの文法用語なども知ったり、国語に限らず幅広い知識の修得の場になった。下沢先生が事務局長で、日点に事務局があり、その下での事務局員ではあったが、当初は仕事はあまりなかった。それらしい仕事は、『改訂日本点字表記法』(1980年発行)の編集委員になってからのことになる。その点字版の製版をもっぱら手がけた。このころは、もちろん足踏み製版機だった。『日本点字表記法 1990年版』からは、墨字原稿はパソコンのワープロデータになり、点字もパソコン点訳による自動点字製版になった。「日本の点字」や他の出版物も同様で、作業は大幅に楽になった。

1991(平成3)年度から直居鉄先生が事務局長になり、事務局員としての仕事も増えた。そして、2002(平成14)年6月の第38回総会で、事務局長に選出された。実はこの年の3月、胃がんのため胃の摘出手術後、腸閉塞を併発し、約2か月の入院生活を余

儀なくされ、5月に退院したばかりで、日点委に関わるようになって初めて総会を欠席せざるを得ないときだった。

それ以後、会長・副会長を始め、委員・事務局員の方々の、陰になり日向になりのご協力・ご援助のおかげで、何とか職務を果たしてこられた。日点を定年になってからもパートタイマーとして勤務し続けていられるのも、日点委の事務局長であるおかげかもしれない。

ヘレンケラー・サリバン賞を受賞して

図らずも、2013年の第21回ヘレンケラー・サリバン賞を受賞した。この賞は「視覚障害者の福祉・教育・文化・スポーツなど各分野において、視覚障害者を支援している『晴眼者』に（社会福祉法人東京ヘレン・ケラー協会が）お贈りする賞です」（東京ヘレン・ケラー協会ホームページから）。10月2日に同協会で贈賞式があり、賞状とヘレン・ケラー女史の直筆のサインを刻印した立派なクリスタル・トロフィー（重さ2.6kg!）をいただいた。選考理由によると、日点委の事務方を長く務めたことが大きなウエイトを占めている。確かに日点委としては無給だが、ボランティア意識はなく、点字に関わる仕事の一環としてこなしており、時には日点の勤務時間中にも及んでいる。また、拙著（『点字・点訳基本入門』）の印税もそれなりに入ってくる。点字で多少の金もうけをしているとも言える。過去の20人の受賞者を見てみると、ボランティア精神旺盛の方や新たな盲人福祉分野を築いた方々ばかりである。その方々と比べると気恥ずかしい思いが先に立つ。もちろん、受賞が嬉しくないはずはないのだけれど。

ひよんなことから点字と出会い、大好きになり、それが趣味にもなり生涯の仕事にもなった。一番の趣味を仕事にしないほうがよいと聞くこともあるが、私としては好きなことが仕事になっていることをとても幸福に感じている。これからも気力・体力の続く限りは、点字に関わり続けたいと強く念じている。

特集「小林一弘さんを偲んで」

小林一弘さんが2012（平成24）年12月10日、逝去されました。

小林さんは、日点委事務局担当、盲教育界代表委員、学識経験委員、および副会長を務められ、勇退後は会友として日点委の働きを見守っていただきました。

事務局担当となられる前から、『日本点字表記法（現代語篇）』発行（1971年3月）のために、点字原稿の墨字訳を担当されるなど、日点委と深いかかわりをもっておられました。40年以上にわたって、温厚な人柄と、教育実践に裏打ちされた深い学識とによって、日点委を創成期から今日に至るまで育てていただきました。



「日本の点字」では、小林一弘さんを偲んで特集を組み、日点委会長・木塚泰弘、会友・塩谷治、ご子息・小林秀之の3人の方々に執筆をお願いしました。

故小林一弘氏略歴

1935（昭和10）年3月11日 東京に生まれる

2012（平成24）年12月10日 逝去。享年77

学歴・職歴

1947（昭和22）年3月 茨城県結城郡西豊田村立西豊田第一国民学校卒業

1950（昭和25）年3月 東京都新宿区立牛込第三中学校卒業

1953（昭和28）年3月 東京都立戸山高等学校卒業

1957（昭和32）年3月 東京教育大学教育学部特殊教育学科卒業

1958（昭和33）年2月 東京都立八王子盲学校講師、のち教諭

1964（昭和39）年4月 東京都立葛飾盲学校教諭

1972（昭和47）年9月 東京教育大学教育学部附属盲学校教諭

1986（昭和61）年4月 東京都立久我山盲学校教頭

1989（平成元）年4月 東京都立葛飾盲学校校長

1992（平成4）年4月 東京都立文京盲学校校長

1995（平成7）年3月 東京都立文京盲学校校長退職
同年4月より1年間 東京都教育委員会就学相談室嘱託
1996（平成8）年12月以降 淑徳短期大学・日本社会事業大学・武蔵野女子大学非常勤講師

活動歴

1991（平成3）年5月 日本点字図書館評議員
1992（平成4）年6月 全国盲学校長会会長
1993（平成5）年6月 全国特殊学校長会会長
同年10月 全国高等学校長協会入試点訳事業部理事長
1997（平成9）年7月 麻の葉学園理事

日本点字委員会歴

1971（昭和46）年7月～1977年度 事務局担当委員
1972年度～1993年度 盲教育界代表委員
1994年度～2010年度 学識経験委員および副会長

受賞歴

1978（昭和53）年11月 第9回博報賞（視覚障害者教育部門）受賞
1994（平成6）年11月 文部大臣教育者表彰受彰
1998（平成10）年12月 文部大臣教育功労者表彰受彰
2002（平成14）年12月 内閣総理大臣障害者関係功労者表彰受彰
2005（平成17）年4月 瑞宝小綬章受章
2006（平成18）年11月 点字毎日文化賞受賞

主な著書

『私の歩行指導』私家版 1975
『南山小学校視力保存学級に関する研究』あずさ書店 1984
『視覚障害教育の実際』あずさ書店 1995
『視力0.06の世界 ― 見えにくさのある眼で見るということ ―』ジアース教育新社 2003

小林一弘前副会長の死を悼む

日本点字委員会会長 木塚 泰弘

1955（昭和30）年、附属盲の高等部1年に入学した1学期、大川原潔先生の一般社会の時間に、文部省や厚生省、第一銀行や東京中央郵便局などの見学をしました。そのとき、東京教育大学教育学部特殊教育学科の3年生が付き添いとして一人ずつ介添えて、周りの状況を説明しながら誘導してくれました。その中の一人が小林さんでした。私の担当ではありませんでしたが、互いに自己紹介をして初めて話をしたのがその後の深い関わり合いのきっかけとなりました。

その後小林さんの提案で、夕食後雑司ヶ谷分校寄宿舎の自習室で、小説を読んでもらうことになりました。さっそく自治寮の文化サークルを立ち上げ、集まった数名で、小林さんとの連絡係に西村早苗さんを決めて、次の週から毎週1回読んでもらいました。最初はメンバーからのリクエストに応じて短編の翻訳物を中心に、いろいろなものを読んでもらいました。小林さんが特殊教育学科4年生のときから約2年間は、言文一致運動を皮切りに日本文学史に沿って代表的なものを系統的に読んでもらいました。

私が今も印象に残っているのは、最初に読んでもらった二葉亭四迷の『浮雲』の主人公^{ぶんぞう}の優柔不断な性格と言動でした。次に、樋口一葉の『たけくらべ』の美登利の初恋の心の動きでした。

最も強烈だったのは、有島武郎の『或る女』の主人公・葉子の情欲の激しさで、婚約者を訪ねてアメリカに向かう船室の中で、倉地^{くらち}との肉欲のすさまじさでした。

小林さんは、登場人物の会話を抑揚や声量、あるいは声色^{こわいろ}までも変えて、その人物の性格や心の動きを言葉で表そうとしていました。淡々と読む「地」の文章との対比効果は抜群でした。さすが国語専攻で不断的な努力が偲ばれました。これは訪問式の朗読サービスのさきがけではないでしょうか。

小林さんと私には共通点が多くありました。二人は1935（昭和10）年いのししの生まれで、しかも血液型はB型です。そのうえ二人はそれぞれ職場をたびたび変えています。小林さんは都立盲学校4校と附属盲をあわせて、都内のすべての盲学校に勤めた最初の人であり、今後は破るのが難しい記録です。

ただ同じ年に生まれたと言っても、小林さんは3月11日、私は5月14日で2か月の

差ですが、小林さんは早生まれで1学年上です。そのうえ私は結核菌と戦っていて、4年遅れて高等部1年に入学しましたから、最初にお会いしたときは5学年の違いがありました。

飲んだ席の戯れに「小林さんは小学校を出ていないんだよ」ということを話題にしました。小林さんは真珠湾攻撃があった年に、戦時体制の小国民を育てるために開始された国民学校制度の1期生として入学し、6年間続いた最後の年度に疎開先の茨城県結城郡西豊田村立西豊田第一国民学校を卒業して、家族とともに新宿区の山吹町に引っ越してきました。ちなみに私は、真珠湾攻撃の翌年に満州国奉天市（現遼寧省瀋陽市）の北陵在満国民学校に入学し、敗戦後新京特別市（現吉林省長春市）順天国民学校から引き上げてきて、福岡県糸島郡小富士村立小富士小学校を卒業しています。

小林さんは、新制中学1期生として、新宿区立牛込第三中学校を卒業し、東京都立戸山高等学校、東京教育大学教育学部特殊教育学科を卒業していますが、これらはすべて、山吹町の自宅から歩いて通学したものです。

東京都立八王子盲学校に勤めていたときも、山吹町の自宅から通勤していました。

1964（昭和39）年4月、八王子盲の同僚小池ハマさんと結婚すると同時に東京都立葛飾盲学校に転勤するとともに、練馬区の石神井公園に新居を構え、ハマさんは八王子盲に、小林さんは葛飾盲へと通いました。

1971（昭和46）年、『日本点字表記法（現代語篇）』が編集会議でまとめられた後、点字製版は阿佐さんが、墨訳は小林さんがボランティアとして引き受けてくれました。放課後や休日に久我山盲で私と小林さんと、点字版と墨字版の読み合わせ校正をして、点字版の印刷・製本は下沢事務局長に、墨字印刷は久我山の野口印刷でタイプ印刷としました。この実質的な働きにより、小林さんは正式な事務局員になりました。

1972（昭和47）年、私が国立特殊教育総合研究所（当時）に移り、盲教育界代表委員の資格を失ったので、小林さんは、関東地区選出の盲教育界代表委員になりました。学識経験委員に選ばれた私と国文法の研究を行い、現代仮名遣いと文節分かち書き、そして複合語の切れ続きについて、仮名文字である点字の読み書きの立場から日本語の本質を極めようと議論しました。

1980年の『改訂日本点字表記法』では、「言葉の意味」、「文節関係」、「複合語の語頭の拍数」が3拍か2拍かで議論をしました。また、開きと閉じが区別できるようにカッコやカギを複数つくり、相互変換に耐えるように配慮しました。のちに本間一夫会長が、これは将来を見通した改訂だと言っておられました。

小林さんは1993年度まで盲教育界代表委員をしておられました。日本の点字100周年を終えて、本間会長が顧問となり、阿佐副会長が会長、木塚が副会長になった後、小林さんは文京盲学校校長、全国盲学校長会会長、全国特殊学校長会会長になった際に盲教育界代表委員を辞して、学識経験委員に選出され副会長に選ばれています。

また、2002年に阿佐会長が顧問となり、木塚が会長となったとき、田中副会長と二人で副会長を務めて、会長を支えてくれました。

副会長時代、「日点委通信」や「日本の点字」の編集長を務められ、総会の前日に今度の日本の点字をどのように編集するかと相談してから提案されていました。また、『試験問題の点字表記』では、その責任者として、あまり細かいことでしぼりつけるのはよくないと常に主張しておられました。

一方、1972年に附属盲に転任されたのちは、中学生の国語の担任として点字についてはもちろん、漢字の意味や用法を細かく指導されておられたようです。生徒たちが高等部に進んでクラスごとの同窓会をやるとき、石神井公園の自宅に生徒たちが次々に押しかけて、ハマさんは「あまりにも多かったので、どのクラスが来たのか覚えていない」と言っておられました。

小林さんの著書『視力0.06の世界』の中で、小さいときから色は見えず薄霧の中の「モノクロ」の世界で、その時々^の差別に耐えてきたことが書かれています。また、小池ハマさんと結婚するときのことについて次のように書いています。《プロポーズと同時に、かなり強度の弱視であることを包み隠さず具体的に話しました。先天性の弱視で原因は不明なこと、両親がいとこ同士の血族結婚であること、母が私を懐妊していたときの状況、遺伝するかどうかはよくわからないこと、ただ、全色盲に近い色覚障害があるため子どもや孫に表われる可能性があることなど、知っておいてほしいことはひととおりに話しました》(同書 p. 123)。たまたま石神井公園の自宅の近くに、大山信郎先生のぶろうが小さな診療室を持っておられたので、3人の子どもがそれぞれよちよち歩きを始めた頃、大山先生に診てもらい、そのたびに大山先生は、弱視になる心配はないと診断され、そのとおりに3人ともすくすくと成長していきました。《気にしていた視覚障害は、子どもに生まれませんでしたので安堵しました。一番気になっていた色覚障害も生まれませんでした》(同書 p. 125) と小林さんは書いています。

附属盲の後半に所沢市のこてさし小手指駅の近くに引っ越して、そこから通勤され、ハマさんは二人目のお子さんが出来たときから八王子の職を辞しておられました。小手指に転居されてからも附属盲や八王子盲の卒業生などが自宅を訪問していました。生徒に

はやさしくおだやかに接しておられましたが、漢字の使い方や作文などでは厳しく、訂正の「赤」を丁寧に入れておられたようです。そのため、生徒たちには慕われて、卒業後もいろいろな相談や楽しい会話を求めて自宅への訪問も続いていました。

また親思いで、毎月の日点委の集まりの後一杯やるのが長年の慣例でしたが、時々、山吹町の母親を訪ねるからと酒席には出ないで会議後すぐに出かけておられました。

その後胃がんで食道までかかる全面摘出の手術を受けられ、回復後日点委にも毎月出席されていました。好物のそばが食べられないのが残念だと言っておられました。「本当は喉頭にもがんがあるらしいのだけれど、それまで取ると会話が出来なくなるので残しているから、いつ再発するか分からない」とそっと言っておられました。

その後視力が落ちて、活字を読むことが出来なくなりました。奥様に読んでもらって聞いていても、漢字がないとなかなか意味を理解するのが難しく、特に同音異義語などは難しいと、『点字毎日』に書かれていました。おそらく、点字や音声で日本語を理解している読者の苦労が身にしみて分かったと思われたのでしょう。

2009年の「レイ・ブライユ生誕200年・石川倉次生誕150年記念点字ビッグイベント」が日盲委と日点委の共催で戸山サンライズで行われたときは、奥様の付き添いで参加しておられました。

また、翌2010年の11月1日、中央区築地の東京盲啞学校の跡地の近くである「市場橋公園」の一隅に立てた「東京盲啞学校発祥の地、日本点字制定の地」記念碑の除幕式で、元・全特長で盲・ろうに関係があり、日点委の副会長である小林さんに講演を頼みました。

両校の歴史と日本点字の歴史をよく調べて、内容もよく、声もお元気に約1時間話されました。

それがみんなの前に姿を見せた最後となりました。この特集を編集するに当たり、その録音を探しましたが見つからず、原稿が残っていないかと、奥様に電話をすると、あのときは視力も落ちていて、項目だけを大きな紙1枚に1項目だけ書いて、それをめくりながら目を近づけて読んでいたので原稿もないとのことでした。奥様は、あのときがみなさんとお別れを言いたいと思っていたのでしようとおっしゃっていました。

最後の手術の後は言葉も発せられなくなり、奥様の手のひらに字を書いて人とのコミュニケーションを取るようになりました。手の力も弱くなったので、奥様が小林さんの手に手を添えて奥様の手のひらに字を書いてくれるのを手伝っていました。

また、強い細菌に感染されて無菌の集中治療室に入り、奥様や家族でも一日1回程度全身を消毒して指の会話をし、短い時間でそこを出なければならなくなりました。

多くの人からお見舞いに行きたいというのを、理由を言えずにすべて断っていたので、私が引き合わせたくないと思われたのではないかと、奥様は今でも気にしておられます。

お通夜と葬式にはたくさんの教え子や教育関係者が集まり、最後のお別れをしました。まったく惜しい人を亡くしたものだと言えませんが、残念でなりません。

小林一弘先生のこと

日本点字委員会会友 しおのや 塩谷 おきむ 治

まさか、今ここで私が小林先生の追悼文を書くことになろうとは、夢にも思わなかった。思えば、長い間いろいろな場面でずいぶんお付き合いをいただき、今まで、そのお付き合いの延長線上にあるという感覚しか持ち得ていないのが正直な気持ちである。

私が初めて小林先生にお会いしたのは、昭和48年5月のことになる。紆余曲折の末、縁あって当時の東京教育大学附属盲学校（のちの筑波大学附属盲学校、現筑波大学附属視覚特別支援学校）に赴任したときのことである。当時の附属盲中・高等部国語科には4人の教員がいて、中学部を小林先生と私の母親と同年代ほどにも当たる大先輩・宮内鈴子先生が受け持たれ、高等部を附属盲の大御所・河辺精孝先生きよたかと新米の私とが受け持った。当時の附属盲学校では、特に国語科としてまとまった教育方針というようなものはなく、それぞれがほぼ勝手に近い形で、個性的な授業を展開していた。高等部の現代国語では、図書館授業と称して、教科書をやりたくない生徒を図書室に集めて、自由研究をするというようなこともやっていた。私は私で、新米の若気から、教科書に反発するという気持ちもあり、1年間近代文学の講義のようなことをやっていて、誰からもクレームをつけられることがなかった。古き良き時代であったと言えよう。

そうした中で、中学部担当の真面目な小林先生の授業は生徒にも定評のある充実したもので、常に大変緊張感あふれるものであった。特に、弱視というご自身の体験か

ら、弱視教育には特別な力を入れておられた。また、生徒の間で評判がよかったのは、全盲生徒に対する漢字教育と点字教育であった。漢字の音と訓の組み合わせに関するていねいな解説と漢字の使われ方についての指導は、のち点字毎日の連載記事となって結実する。点字教育では、独自に点字の進級試験のようなシステムを作って、試験を行い、「はい、何級合格。」と言って証書を渡し、点字学習に対する動機づけなどをしてきた。卒業生の中でも、中学時代の小林先生の丁寧な指導には感銘を受けたし、感謝しているという人が多い。

前述のように、当時の附属盲学校では、個々の教員が好き勝手に授業を展開しているようなところがあって、共同で研究活動をするというようなことも少なかった。そうした中で、1度だけ小林先生と私の共同研究という形で発表したものがあつた。昭和53年に長崎で開催された全日本盲教育研究大会でのことであつた。題目は「点字の古文表記とその望ましい在り方について」と言うもので、拗音や促音表記がなく、一部の補助動詞を続けて書くなど、古文独特の点字表記が、生徒の古文読みにいかに著しい負担を与えているかということを実験結果で示したものであつた。このときの発表は、後の『日本点字表記法 2001年版』第6章「古文の書き表し方」に生かされることになるが、そのときの表記法編集委員も小林先生と一緒に努めさせていただいた。

附属盲学校での先輩としては、昭和61年に小林先生が都立久我山盲学校教頭として転出するまで、13年間続くが、その後も日本点字委員会委員として、つい最近まで一緒に活動させていただいた。また、こうしたお付き合い以外にも、教え子たちを介しての長いお付き合いがある。

盲学校というところは、生徒数が少ないこともあつて、普通校に比べると生徒と教員の間が非常に密接であるという特徴がある。特に最終学年の担任を持ったりすると、卒業後も、毎年のようにクラス会があり、教え子がそれぞれ結婚をし、定年退職を迎えるころまでお付き合いが続くことになる。教え子に言わせると、学校を卒業してなお先生と一緒に旅行をするということについて、職場の同僚たちから不思議がられるという。さもありなんとは思ふが、私どもにとっては大変教員冥利に尽きるころである。

私は、高等部においても、のち中学部担当に移ってから、ふしぎなことにその最終学年の担任ばかりさせられた結果、比較的クラス会が多い。そうした中で、必ず小林先生と私の二人が招かれるクラスがある。そのいきさつは次のとおりである。

盲学校へ赴任して、10年ほど高等部を担当したのち、中学部へ移って最初に持った

担任が、やはり最終学年の3年生のクラスであった。担任発表は毎年入学式の後にある始業式で行われる。この担任発表の儀式は独特の雰囲気があって、この日まで生徒に担任情報を伝えることはご法度になっているから、生徒は次の担任が誰になるのか誰も知らない。幼稚部から始まって、専攻科のクラスまで、新しい担任の名が呼びあげられるたびに、あるクラスでは歓声と拍手が沸き起こり、厳しい教師にあたってしまったクラスでは「ゲーッ」といった露骨な反応が沸き起こる。

さて、やがて中学部3年の担任として私の名前が読み上げられると、会場はシーンとしてしまった。これは明らかに歓迎されていない反応なのである。実は、その20日ほど前に行われた終業式で、久我山盲学校の教頭として転出する小林先生の離任の挨拶があった。私は、このとき、次年度私が担任することになっているこのクラスの様子をじっと観察していた。そうすると、ある女生徒などは、小林先生の挨拶を聞きながら涙を浮かべていた。このクラスは、1年生、2年生と2年間にわたって小林先生が担任していたクラスなのである。この後を引き受ける担任はまことにやりにくい。したがって、誰も引き受け手がないまま私に回ってきたのだろう。私の担任の持ち方は、どうもこのような貧乏くじに似たものが多い。

最初のホームルームでの生徒の反応は、更にショッキングなものであった。私が一通り担任としての挨拶を述べた後、一瞬沈黙の空白ができた。そのとき、ある女子生徒が、ポツンとつぶやくように「ああ、小林先生来てくれないかな。」というのである。このつぶやきを聞いて、多分私は青ざめたに違いない。長い教員生活の中で初めて味わう生徒からの仕打ちである。

そんなスタートではあったが、1年を経てそれぞれの進路も決まり、生徒たちは無事卒業していった。その後は毎年クラス会で会うことになり、キャンプや旅行もよくした。そして、このクラスに限って、最終学年の担任である私のほか、必ず小林先生をお招きするようになった。のちに全国特殊学校長会の会長まで務められ、我が国の特殊教育界の大御所になられても、いつでもかつての教え子たちと飲んだり旅行をしたりすることを楽しみにしておられた。

そもそも、一口に教員といってもその目指すところは人によって様々で、初任者研修期間のうちに、だいたい進むべき方向が見えてくるものである。管理職コースを目指す人、組合コースを目指す人、特に国立大学附属の学校では、研究者コースを目指す人も多い。その場合、組合コースを目指す教員が必ずしも生徒に理解があるとは言えないのだが、少なくとも管理職コースを目指す教員や研究者コースを目指す教員は、

生徒との関係については常に割り切った考えで一定の距離を保っている人が多い。いわゆる生徒にのめりこんでいくということが比較的少ない人たちである。

小林先生は、その経歴が示すように、教員として最初からはっきりと管理職コースを目指された方である。そしてご承知のように都立盲学校の教頭、校長を経て、平成4年6月には全国盲学校長会長、平成5年6月には全国特殊学校長会長まで上り詰め、平成14年の内閣総理大臣障害者関係功労者表彰受賞ほか、数々の教育関係表彰を受けて来られた。

そうした立場にあってもなお、これまで縷々述べてきたように、小林先生は視覚障害生徒を心から愛していた。個々の生徒の話になると、ある日、あるときの細かいことまでよく覚えていて、話の尽きることがなかった。ご自身が弱視者であるということもあるかもしれないが、最初から管理職を目指していながら、常に視覚障害生徒に愛情を持ち続け、生徒の目線で教育を考えて来られたという人を、私は小林先生以外に知らない。

小林先生が管理職コースを目指されたのにはそれなりの理由があった。我が国の特殊教育の体制を何とか改善したい、中でも視覚障害教育の専門性の向上ということについては、強い信念があり、その実現のために管理職コースを選ばれたのではないかと思える。特殊学校教育の専門性維持のため、特殊学校教員の異動については、本人の希望があれば定期異動をしなくて済むよう、全国特殊教育学校長会長の立場で当時の文部省に働きかけ、文部省でも、一定の理解を示すところまでこぎつけたと聞いている。しかし、現場の教育委員会レベルまでは浸透しないまま今日に至っているようである。それどころか、今日では、特殊教育の専門性はおろか、ご存知のように盲学校、聾学校、養護学校はなくなり、障害種別をまったく無視した特別支援教育というものに移行してしまった。障害児者に対する教育は、いわば「その他」扱いという乱暴な教育行政が平然とまかり通ってしまっているのである。小林先生からは、残念ながらこの教育改変の感想をお聞きする機会はなかった。多分怒り心頭に発せられているはずである。

また、小林先生は自ら弱視者としての立場を貫き通し、障害当事者の立場でさまざまな主張をしてこられた。これもご立派というほかはない。自らの体験を赤裸々に綴ったご著書『視力0.06の世界』は、盲学校教員必携の書と言ってよい。私なども、もう少し前にこの本に出会っていたら、あのとき、かのとき、〇〇君や××さんにつらい思いをさせずに済んだのにというようなことに多々思い当たる。

最後に、また私の感情に浸って恐縮だが、これで私の半生にわたる活動の場であった筑波大学附属盲学校・国語科の大先輩たちはすべていなくなってしまった。やんぬるかな。小林先生の死を悼むと同時に、心の中をわびしい風が吹き抜けていく気がする。

家の顔

筑波大学人間系（障害科学域） 小林 秀之

はじめに、闘病生活が始まって以来、多くの方からお見舞いにお伺いしたいというお話を頂きました。本当にありがたく感じておりましたが、父も退院し自宅に戻れると本気で考えていたようですし、つき添っていたのはほとんどが母であったのは事実ですが、入院中は家族との時間として大切にに使わせて頂きました。ご理解を頂けますと幸いに存じます。

現在、私は筑波大学人間系（障害科学域）において、視覚障害教育に関する教育、研究活動をさせて頂いております。父と同じ道を進んだのは、父の影響と捉えられていることが多々あります。その側面があったのは事実ですが、広島大学学校教育学部盲学校教員養成課程に進学したのは親元を離れて下宿生活をしたい、そのためには親元を離れる説得力のある説明が必要だと考え、「盲学校の教員になりたい」という理由をでっち上げたというのが正直なところです。

秀之の門出に壽ぐ

一九八五年 五月

この道を何歩か先を歩いている父より

広島大学で視覚障害教育について学び始めた1か月で父から贈られた『南山小学校視力保存学級に関する研究』の見返しに書かれている言葉です。この時期から、社会人としての父の姿、論文に接することになりました。大学入学前までは「ちょっと目の不自由なお父さん」という程度で、きょうだいの中でもこれに変わりはないと

考えています。ただし、視覚障害教育に触れ始めてからは、正直に申しますと同じ道を進んだことに後悔を覚えることもありました。父と接した多くの方は社会人としての姿を家族以上にご存知であると思いますので、家庭の中の父について思い出させて頂ければと考えております。

父の評判で一番良く聞こえてきたのは「穏やか」「温和」といったものが多かったかと感じております。一方、私はどちらかというところ「厳しく」「激高しやすい」父という印象の方が強く記憶に残っています。ゲンコツをされるのは当たり前、勉強ができなければ叱られ、今となれば理解できますが周りのお友だちがお父さんとキャッチボールしているという話を羨ましく聞きながら、また、日曜日に仕事を持ち帰れば邪魔になるからと母に連れられて外に遊びに行くなど「やさしいお父さん」像からはかけ離れておりました。唯一、父と一緒にスポーツで覚えているのは朝のマラソンで、おそらく父は精いっぱい工夫をしてくれていたものと思っています。西武池袋線にかかる陸橋の上からは朝日が眺められる場所がありましたので、元日にはそこまでマラソンし、初日の出と一緒に眺める元日が何年間か続いていたことは良く覚えています。

また、父は「教育者」と評されることも良く耳にしました。高等学校に進学した際に、「もう一人前の大人です。あれこれと注意することは今後しないので、自覚をもって生活しなさい。」と言われたことも鮮明に覚えています。これは、自分の子どもたちが同じ時期にさしかかった際には、同じように伝えたいと考えていることのひとつです。この方針は確かに1回を除いてまさにそのように育ててもらったと思っています。ただ母からは叱られ続けておりましたので、もしかすると両親が役割分担を上手に行っていたのかもしれない。

その1回は、高校2年生の時に文化祭の実行委員会をしていた時のことです。準備のため夜10時くらいまで高校に残っている日が続いた時に、父が高校に電話をかけ、ある意味で楽しかった時間に水をさされることになってしまいました。同じ実行委員会の仲間に申し訳ないとも感じるどころがあり、父に抗議しましたが、逆にものすごく叱られてしまいました。母は、高校に電話をかけることを留めさせようとしたようですが、一度言い出したら止まらないところもあり、何ともならなかったようです。先に「激高しやすい」と書きましたが、こんな側面も家族の前では当たり前でした。

視力が低かったことに加え、視野が狭かったことも要因としてあるかとは思いますが

が道路工事現場のA型をした黒と黄色のバリケードに気づかず進入し、血を流しながら帰宅してきたこともありましたが、家族は傷が心配でしたが、帰宅の一声は「カメラを持ってこい」であり、写真を撮って抗議の資料にすると息巻いている姿は、「頭に血が上ったら怖いお父さん」の一面でした。

振り返ってみると、このような父の姿に接することができていたのは一緒に生活している大学進学前まででした。その後は帰省した時に、多少機嫌が悪くなるのは「昨年の大晦日には日本酒の一升瓶が2本空になったのに、今年は1本しか空かないじゃないか」程度でした。

また、大学進学後は、家族は嫌がりましたが「視覚障害教育」の話を酒を飲みながら色々と教えてもらいました。その情熱は皆さんが良くご存知の通りだと思います。この意味で私は恵まれていると思いますし、もしかすると父の子育ての延長だったのかもしれないと感謝しています。

「外の顔」と「家の顔」が違うのは、私もしっかりと受け継いでいるように感じますし、程度の差はともかくとして誰にでもあることかと思っています。稚拙な文章で心苦しいのですが、そんな姿があったのだと「外の顔」の父を時々懐かしく思い出して頂ければ幸いです。

最後に、葬儀の際には本当に多くの方にご会葬を賜りありがとうございました。家族の中では家族葬にという話も出ておりましたが、多くの方に温かく送って頂き父も嬉しかったことと思います。耳元で父が「ほら、だから言ったじゃない」と囁いたような気がしております。

10周年を迎えた日本点字技能師協会に思う

にほん
日本点字技能師協会理事長 中山 敬

日本点字技能師協会（以下「日点協」）は2013年に10周年を迎えた。現在の会員数は、正会員約200名、賛助会員約70名である。特定の拠点を持たず、会員と点字に携わるあらゆる方々から協力をいただき活動を続けている。

正しい点字の普及を目指し、視覚障害者の情報環境の改善や福祉の増進に貢献するという目的は、この10年で変わったことはなく、これからも変わることはない。

しかし、日点協を取りまく環境は変化している。公共施設の点字表示は一般的になり、家電製品など生活のなかにも点字が浸透しつつある。2006年に国連で採択された障害者権利条約では、障害の定義そのものが変わっている。障害は環境によって作りだされると再定義されたのである。

この小論では、点字がおかれる将来の環境を想像し、その変化に適応し社会に役立つ日点協でありたいと願い、2013年度の日点協の具体的な活動を通して思うことを述べていきたい。

1. 日点協通信

『日点協通信』は毎月発行する日点協の会報誌である。正会員と賛助会員に配布し、2013年12月発行分で129号となった。紙媒体の墨字版か点字版、あるいはメール添付（墨字版・点字版・テキスト版）のいずれかを会員は選ぶことができる。

内容の特徴をひと言でいえば「読みごたえがある」という言葉に尽きる。「読みごたえ」をつくり出すのは、各種研修会、つまり学習会・講演会の詳細な報告である。その報告には、日本点字委員会の研究協議、教点連セミナー、日盲社協の研修内容なども含ませていただいている。点字に関するテキストが毎月送られてくるといっても過言ではない。そのため分量も多い。毎号、墨字版（B 5判）は30ページ、点字版は100ページほどになる。

この詳細な報告は、参加できない会員にも情報を共有してもらいたいという、先輩理事の熱意から始まったものと言える。研修会の参加者とともに研修内容を学び、各地の活動でその情報や技能を普及させることにも役立っている。

また、全国の会員全員が参加できる利点を生かし、新たな活用方法も少しずつ実施

している。例えば、2013年12月号では、講師に会報誌上で講義をしていただくというかたちで、情報処理点字をテーマに誌上学習会を行った。

2. 研修会

『日点協通信』に詳しく報告する研修会は、講師の方々の周到的な準備と熱心な参加者によって毎回充実した内容となる。2013年度は、4月の総会翌日に講演会を2つ、8月に3つの学習会、そして2月に2つの学習会を開催した。原則会員優先だが、誰でも参加できるオープンな研修会である。学習会では、できる限りワークショップの形式で参加者が体験できる工夫をしている。

4月の講演会は名古屋で開催した。内容は「名古屋（愛知）における点字事情」と「情報は‘いのち’ 点字と市民権50年の歩み」。後半の講演会では筑波技術大学の学生による「未来へ点字をつなげる宣言」も行われた。この宣言の様子は YouTube にアップされている。

8月の学習会は大阪を会場として3つのテーマで開催した。「国語教科での試験問題の書き方」では、『試験問題の点字表記 第2版』と全国高等学校長協会入試点訳事業部との点訳方法の違いなどを学んだ。「数学の表記 中学校数学を中心に」では、『点字数学記号解説暫定改訂版 第2版』を参考に、数学の参考書などの点訳方法を学んだ。この2つの学習会では、事前課題を講師の方に準備していただき、点字使用者には事前課題をデジタイズして渡した。「触って知るとは 触って分かる触図作成のために」では、「触る」ことをテーマに、目で見て理解することと触って理解することの違いを学んだ。講師の方に立体物や点図を持参していただき、実際に参加者が触る体験をしながら学習会を進めた。

2月の学習会は東京で、楽譜点訳と情報処理点字をテーマとした。この学習会でも事前に質問を募るなど、自ら参加する形式にしている。

開催場所は東京や大阪に集中しているが、2014年度は総会及び翌日の研修会を福岡で開催する。財政的な制約もあるが、今後もできる限り各地域で研修会を開催し、多くの会員が参加できるようにしたい。

3. 対策本と点字技能チャレンジ講習会

『日点協通信』の発行や研修会の開催はおもに会員向けの事業だが、将来の点字技能師および将来の日点協会員のための事業も行っている。『点字技能検定試験の対策

過去問題の正答と解説』（以下『対策本』）の製作・発行と点字技能チャレンジ講習会の開催である。

対策本の内容は試験問題の模範解答と解説である。いわゆる試験の過去問で、会員の有志が製作している。合格者の声を掲載し、特集を組むこともある。第10回では点字技能師と点字指導員の2つの資格の関係について触れている。第12回では点字技能師の資格をとったことについてのアンケート結果などを掲載している。昨年と今年は「試験注意事項」（試験の直前に受験者に送付されるもので、解答方法などの細かい指示が書かれている）を載せた。

今までは、完成した墨字版をもとに点字版を校正するという手順をとっていたが、今年の対策本では墨字と点字が同時に完成するように製作した。これは、墨字中心ではなく、点字を優先して考える日点協の姿勢のあらわれと取っていただければと思う。

点字技能チャレンジ講習会は、点字技能師を目指す方などを対象に、2日間にわたり学科・実技試験の講義と実技試験の模擬試験を行う。日点協設立の翌年2004年からはじまり、当初は視覚障害者支援総合センターとの共催という形で行われ、2007年からは日点協が引きつぎ現在に至っている。

2013年度の事業ではないが、日点協では対策本のほかに、現在2冊の本を発行している。『点字に役立つ国語』と『中学英語の点字教科書を見てみよう』である。『点字に役立つ国語』は墨字版も点字版も同じ価格にしている。専門点訳と言われる分野だけでなく、一般書の点訳でも日本語、つまり国語の豊富な知識が必要なこともある。本書はその点に応える貴重な書籍である。また、試験対策だけではなく、点字および福祉を学ぶための良質なテキストである『点字のことがよくわかる本 点字技能検定過去10年の出題例から学ぶ』も発行した。

4. 家電製品の点字サイン調査

2013年度は、家電製品の点字サインの調査を新たに始めた。視覚障害者と晴眼者がペアになり、洗濯機・炊飯器・電磁調理器を調査対象とした。ある家電量販店から協力いただき、西宮、名古屋、千葉、神戸で5組のペアが調査した。

点字表示があるかどうか、操作部の形状は使いやすいか、ピープ音の有無とその種類・音量、その他の音声の有無など、利用者として使いやすいものかどうかの項目にもとづいて調べた。また、点字の表示位置や略称などが、JIS規格「高齢者・障害者配慮設計指針—点字の表示原則及び点字表示方法—消費生活製品の操作部」（JIS T 09

23) に適合しているかどうかも調査項目にあげた。

この調査のねらいは、生活のなかの点字サインの実態を調べ、利用者にとってわかりやすい良い例や、わかりにくいのでこうしてほしいという改善点をメーカーに提示していくことである。社会に働きかけをおこなう意味をもち、結果をメーカーに持つていくことだけではなく、調査過程そのものも日点協および点字技能師の存在を社会にアピールすることになる。視覚障害者と晴眼者がともに調査することにより、お互いの理解が深まることにもつながる。今後も、駅の手すりや郵便ポストなどの点字サインも調べていきたい。

5. これからの日点協

日点協の原点を振り返り、現在の活動を評価していただき、これからの方向性の指針を得るために、10周年記念事業として日点協とかかわりのある方から『日点協通信』に寄稿していただいた。ご自身の点字に対する思いや、日点協への期待や苦言など、先達の声は実に多岐にわたる。「日点協よどこへ行く」という問いかけも含め、今後の活動を考えるにあたって貴重なご意見をいただいた。

ここでは、設立の原点、点字の専門家としての自己研鑽、社会への貢献という視点から、日点協がこれからどのように活動していけばいいのか考えていきたい。

初期の『日点協通信』や『視覚障害』の編集後記とも読み合わせれば、原点のキーワードの1つは国家資格である。『日点協通信』第1号の1ページ目には「協会の仕事としては、点字技能師の身分を国の資格として確立すること」とある。第3号や第6号には厚生労働省との交渉の様子も記録されている。その結果、国家資格までには至っていないが、厚生労働大臣が認定する資格という成果を得た。今後、国家資格に結びつけるために、これまでの活動を地道に続けるとともに、点字の専門家としての資格であることを社会に認めてもらうことが必要である。

点字の専門家として求められることは、専門的でかつ幅広くなっている。一人ひとりが専門技術や知識を高め、それぞれが能力を発揮できるようにしていきたい。専門点訳については、学習会と併せて『日点協通信』を利用することを試みた。12月号の誌上学習会のテーマを情報処理点字にして、年をまたいだ2月に情報処理点字の学習会を行った。1回で終らずに継続的に学べる機会をつくるためである。また、点字サイン調査のように視覚障害者を取りまく生活環境にかかわる事業や、普及が急がれている中途視覚障害者への点字触読指導の研修会など、幅広く求められることに応えて

いきたい。

日点協には、全国の晴眼者や視覚障害者が、点訳ボランティア、教育現場で働く方、施設職員の方など、さまざまな立場から参加している。個人や一つの地域だけで考えていては難しいこともあるが、これまで述べてきた日点協の活動は、より優れた先進的な事例を仲間から学ぶ場にもなる。事業だけでなく、そのような柔らかなつながりも大切にしていくことで、より良い社会へ微力ながらも貢献できると確信している。

6. 最後に

点字技能師の数が少ないことがよく問題になる。受験者数でさえ100人を超えていない。全国の点字使用者や点訳ボランティアの数を考えれば、点字技能師の総数が300人程度というのはあまりにも少ない。学科試験が難しい、パソコン点訳で受験ができないなど、さまざまな原因とその対策が考えられるが、少し視点を変えてこの問題を最後に考えたい。

冒頭で触れた障害者権利条約が、今年日本でもようやく批准されることになった。条約の特徴は障害の定義を変えたことである。その人が見えないことではなく、その人を取りまく環境が理にかなった形で整えられていないことで障害が生まれる、という考えが変わった。つまり環境が障害を生み出す。その環境には私たちの心も含まれる。障害をつくらない環境づくりが求められるのである。

その環境づくりに点字による情報提供は欠かせない。その点字を誰が提供するのか。一定の能力を有することを認められた点字技能師の存在価値がここに出てくる。正しい点字の情報提供が広まることを担うために点字技能師の資格は誕生したはずである。

障害をつくらない合理的配慮を支えるために点字技能師の資格をとる。点字使用者の方々も、すでに高い能力を持っている点訳ボランティアの方々も、障害のない社会を実現するために点字技能師という資格の取得に目を向けていただけないだろうか。各施設の責任者の方と同じ視点で点字技能師の取得を促していただけるとありがたい。そして、そのような環境づくりを目指す日点協の活動にも参加していただければと切に願う。

点字を指で読む人、目で読む人を増やしたい

～ 日本点字普及協会の取り組み ～

日本点字普及協会 藤野 克己

1. 設立の趣旨

点字は、視覚障害者が読み書きできる唯一の文字です。近年、点字を使う視覚障害者が減りつつあり、視覚障害者の教育や福祉に関わる人々の間で視覚障害者の「点字離れ」が話題に上るようになりました。一般社会でも「若者の活字離れ」が言われて久しいのですが、文字の読み書きはできるが新聞や本を読まないという「活字離れ」と、視覚障害者の「点字離れ」とは全く異質のものであり、後者の場合は「文字を失う」ことを意味し、大変深刻な問題です。

一方で、点字が表示されている商品や街中の点字表示も増えてきましたが、それらが社会で広く認知されているとはまだ言えない状況です。点字を誰もが知っている文字として普及させたいという思いで、私たちは日本点字普及協会を2012年12月に立ち上げ、2013年4月に神奈川県からNPOの認証を受けました。

NPO法人になってからまず初めに行ったことは、日本点字制定記念日である11月1日を、日本記念日協会 (<http://www.kinenbi.gr.jp/>) に登録したことです。このことは、点字を社会にアピールする一助になると思います。そして、NPO法人設立後、最初の日本点字制定記念日である2013年11月1日に、その日から三日間にわたって開催されるサイトワールド2013の会場で、視覚障害者支援総合センターとの共同主催で点字普及のイベントを行いました。当協会は、凸面点字器（試作品）の使用体験、Lサイズ点字の触読体験、Lサイズ点字プリンターの紹介、全視情協がインターネット上で公開している「ひとりで学べるたのしい点字」の実演、点字表示のある日用品の展示などを行いました。Lサイズ点字の触読体験をしたある視覚障害の女性は、「私は点字の落第生だったが、この点字なら読める」と嬉しそうに話していました。

点字普及協会は、点字を使う視覚障害者をもっと増やすための活動を行います。さらに、一般の人たちが点字を体験する機会を増やし、点字を使う人々へ思いを広げるとともに、視覚障害の人々の生活上の不自由さを理解して、ふだんの生活の中でさりげなくサポートできる人が増えることを願って活動に取り組んでいきます。

2. 今取り組んでいること

(1) Lサイズ点字の普及

標準サイズの点字に比べて点間・マス間が広く、点の高さも少し高いLサイズ点字の普及に取り組めます。Lサイズ点字は、点字用紙の大きさ（10×11インチ）は違いますが、1行のマス数（32マス）と1ページの行数（18行）は標準サイズの点字と全く同じです。Lサイズ点字は、特に中途視覚障害者が点字学習をする際の導入期に大変有効ですし、そこから標準サイズの点字に移行する人もいれば、そのままLサイズ点字で読書をすることも可能です。国産のLサイズ点字プリンターを使えば、サピエに登録されている14万タイトルを超える点字データすべてをLサイズ点字として利用することができます。

Lサイズ点字を書く道具としては、仲村点字器が製作した27マス点字器（販売停止）と、名古屋ライトハウスが製作・販売している「だいてん丸」があります。これらを利用することによって、点字の読み書きができる視覚障害者が確実に増えるものと期待しています。

ただし、現在標準サイズの点字を触読している人にとって、Lサイズ点字は決して読みやすいものではありません。点字普及協会としては、全部をLサイズ点字にしようなどという気はさらさらなく、標準サイズとLサイズの2種類の点字の中から自分が読みやすい点字を選択できる環境を作るために活動を進めていきます。

2013年10月に、Lサイズ点字に関する資料（Lサイズ点字についての説明、標準サイズ点字とLサイズ点字の見本）を作って会員に配ったほか、希望する団体や個人に送って普及に努めています。

(2) 凸面点字器の開発

点字は、「読むときは凸面を左から右に読み進み、点字器で書くときは凹面を右から左へ書き進む」というのが常識です。したがって点字は読むときの文字と書くときの文字が左右逆の関係にあり、点字学習の初期には、点字使用者も晴眼者も大いに迷ったり混乱します。改めて考えると、読む文字と書く文字の形が違う文字は点字ぐらいいしかありません。点字は触読する文字ですから、凸面点字が主で、凹面点字は点字器がそのように作られているために必要なものだと思います。

点字を凸面から書ける点字器があれば、もっと簡単に点字の読み書きを覚えることができるのではないかと、点字普及協会では凸面点字器の開発に着手しました。

開発をはじめて分かったことですが、すでに、ある中途視覚障害者の依頼で岐阜県と千葉県の人が凸面点字器の試作品を作っていました。それぞれの人にお会いして試作品を見せていただいたり、意見交換や情報交換をしています。同じ人の依頼によるものなので二つとも同じような形をしていて、今のままではとても実用にはならない状態です。お二人ともさらに研究を続けるとおっしゃっていますので、これらの方と連携して、よりよい点字器の開発を進めていきたいと思っています。

凸面点字器の原理はきわめて簡単です。今までの点字器のそれぞれのマスにある六つの凹みを凸点にし、逆に点筆の先をウスのように凹んだ形にすることです。原理は簡単ですが、上からウス状の点筆を下ろして、凸面点字を出すというのは結構大変なことで、凹面点字器で書いたようにきれいな点字を書くのは難しいかもしれません。触読に耐えうる大きさ、形、高さの点字を書くことができる凸面点字器をめざすことになると思います。

なお、すでに凸面点字器の短所はいくつか分かっています。(1)凹面点字器のように速く書けない、(2)左から右に書き進むため、凹面点字器のように左手を一つ先のマスに置いて書きやすくするということができない、などなどです。今までも外国で凸面点字器が作られた例はありますが、普及せずに消えてしまったのは、これらの短所のためかも知れません。

それでも、凸面、凹面の2種類の点字を覚える必要がないメリットの方がより大きいと思われます。凸面点字器の持つ短所をより少なくすることを心がけながら、開発を進めていきます。

先ほど紹介したLサイズ点字同様、凸面点字器も、これだけにしようとは思っていません。凹面点字器に慣れ親しんでいる人は、今までどおり使っただき、読みと書きの違いで混乱している人、中途視覚障害で新しく点字を習いはじめた人にとって凸面点字器は有効だと思いますし、小学校などの授業を使って短時間で点字の読み書きを体験する際には大きな効果を発揮すると思います。

凸面点字器の開発・普及によって、読む文字と書く文字が違うという点字の欠点を解消し、中途視覚障害者が点字を学習する際の負担を軽減したいと思っています。

(3) 視覚障害者向け点字テキストの編集

点字の規則を視覚障害者に分かりやすく解説した資料の作成に取り組み、広く全国に普及したいと考えています。それによって、点字表記の規則を気軽に学ぶことがで

き、点字に親しむ視覚障害者が増えることを期待しています。

3. おわりに

「点字の普及」は決して新しいことではありません。今までも、そして今でも多くの施設・団体に取り組んでいます。しかしそれは、多くの事業・活動の中の一つに過ぎません。その中で、点字の普及を唯一の目的とした点字普及協会を設立し事業を行うことは意味があると思います。

日本点字普及協会の現在の会員数は、個人正会員35、団体正会員5、個人賛助会員7、団体賛助会員1と、まだ小さな団体ですが、会員は1都1道2府16県に広がっています。

日本点字普及協会について簡単に書かせていただきました。当協会の趣旨や活動に賛同してくださる人が増えることを願っています。

日本点字普及協会 <http://tenjifukyu.jp/>

“World Braille Usage”（世界点字便覧）に 日本語点字はどのように紹介されてきたか

日本点字委員会副会長 金子 昭

世界の点字を収録している“World Braille Usage”（『世界点字便覧』と仮に訳しておく）の第3版が2013年春に公開された。第3版の作成を進めたパーキンスのウェブサイトにて電子版が掲載されている。この機会に、日本語の点字が同書にどのように掲載されてきたかを跡づけてみたい。

同書は、今回を含めて3版まで出版された。1953年に第1版、1990年に第2版、それに今回の第3版（2013年）である。

各版を確認しておこう。

第1版。書名・WORLD BRAILLE USAGE — A survey of efforts towards uniformity of Braille notation、著者・Clutha Mackenzie、収録言語数・47、出版社・Paris UNESCO、出版年・1953、ページ数・172。

参照 URL ・ <http://unesdoc.unesco.org/images/0007/000711/0711103eb.pdf>

出版の構想から40年を要したという。ヘレン・ケラーの序文がある。各国語の点字紹介の前に、点字史、各国の点字概略、句読符、発音表記、略字・縮字、世界点字協議会（WBC：World Braille Council）の設立などについて詳細な紹介がある。

“CHAPTER 4 BRAILLE IN ASIA”の中に、“BRAILLE IN JAPAN”の一項目がある（p. 31）。

In 1887, Nobuhachi Konishi, a teacher at the school for the blind (later principal), recognized the importance of the Braille system and encouraged his fellow-teacher, Kuraji Ishikawa to study it. Mr. Ishikawa studied very hard how to adapt the Braille system to the Japanese language, and succeeded in completing his own Japanese Braille system, now used almost exclusively in the education of the blind in Japan. Now various kinds of embossed letters which had been used in the education of the blind were given up. This was a change of

immense importance in the system of both reading and writing.

The system which Mr. Ishikawa designed for the Kana script of Japan is an ingenious and compact form of Braille. Kana is expressed in a syllabary of forty-two syllables of consonant and vowel, five vowels and a nasalization mark. In expressing this in Braille, each of seven consonants combines with the vowels, A, I, U, E and O. Each of these five vowels is formed by permutations of dots 1-2-4. The consonants K, S, T, N, H, M and R are formed from the permutations of dots 3-5-6; and what is interesting is that these are combined with the vowel signs in the same cells, so that each syllable is expressed, not in two symbols, but in one. Take “SO” for example; S is dots 5-6; O is 2-4, “SO” , therefore, is 2-4-5-6. The W syllables are represented by the vowel signs in the lower part of the cell; while the three Y syllables are irregular.

It is probable that, while the synthetic construction of these syllabic signs is of assistance to teacher and pupil in the earliest stages of learning, the latter quickly associates each sign directly with its syllable without calling on his mental processes to analyse its component parts. To memorise the signs for forty-eight syllables and vowels is no very difficult task.

It is stated that English is a regular course in all Japanese schools for the blind and the Braille presses print a limited amount of literature in Romanized Japanese. It is a matter for speculation as to whether under these circumstances, there might not have been some advantage in giving the international Braille signs to the five vowels as well as to the syllables KA, NA, MA, TA, SA, etc. An important factor, however, needs to be taken into account in considering any modification in this direction. Unlike other Asian and African languages, Japanese has been extensively printed in Braille for many years, and most of the younger blind have been educated in it. Changes, therefore, could not be embarked upon lightly, and it will be noted in due course that the main Unesco conference on Braille recognized that “the special characteristics of the Japanese syllabary, and the ingenious adaptation of Braille to it, create a special position and that therefore, there is no justification for any departure from the present system.”

《1887年、盲学校の教師（のちに校長）であった小西信八はブライユの方式が有効であることを認識し、同僚石川倉次にその研究を勧めた。石川氏は、どうすればブライユの方式を日本語に適合できるかを熱心に研究し、日本語の点字体系を完成させ

た。それがいま日本の視覚障害者の教育にほぼ例外なく用いられているものである。今や、過去の視覚障害教育に用いられた様々な凸字はかげをひそめた。このことは、読み書き双方のシステムに大きな転換をもたらしたという意味で、計り知れないほど重要なことである。

石川氏の考案したシステムは日本語のかな文字に対応するものであり、ブライユ点字を独創的に、かつ単純な方式で用いている。かなは42個の子音、5個の母音、および1個の鼻音化記号〔筆者注：撥音のこと〕から成る音節文字である。これを点字で表現するには、7個の子音を母音 A, I, U, E, O に結合させる。5個の各母音は①の点、②の点、④の点の組み合わせで表す。子音 K, S, T, N, H, M, R は③の点、⑤の点、⑥の点の組み合わせで表す。興味深いのは、子音をひとマスの中で母音と結合するという点である。したがって一つの音節は、二つの記号ではなく一つの記号で表される。例えば“SO”（ソ）を考えてみよう。S は⑤⑥の点で、O は②④の点であるから、“SO”（ソ）は②④⑤⑥の点となる。W の付く音節の母音部分は、普通の母音を下に下げたものである。3個の Y の付く音節は不規則である。このように子音部分と母音部分を組み合わせて考えることは、指導者と学習者にとって学習の初期には有効だが、学習が進めば、学習者は子音・母音の各部分を分析する過程をいちいちたどらなくても、直ちにどの文字だと分かるだろう。48個の音節と母音の点字を記憶することは、それほど難しいことではない。

英語は日本のすべての盲学校で通常学ぶ科目であり、点字出版所ではローマ字化された日本語の文書は限られた量しか印刷しないとされている。こうした状況下では、KA, NA, MA, TA, SA などの音節だけでなく五つの母音に国際的なブライユ点字の記号を充てても大して利点はなかったかもしれないが、それは推測の域を出ない。

しかし大切なことは、こうした方向で修正することを考慮するのは必要だということである。他のアジアやアフリカの言語と異なり、日本語は長年にわたってもっぱらブライユ点字で印刷されてきており、大部分の若い視覚障害者は点字で教育を受けてきた。したがって軽々しく変更に着手することができなかった。「日本語の音節には特殊性があり、ブライユ点字を独創的に日本語に翻案している。そのことは特別な位置を造り出しており、それゆえに現行のシステムからどんな形であれ決別してもよいという口実にはならない。」と、主要なユネスコの会議〔筆者注：1950年のパリにおいて開催された世界点字統一会議のことだと思われる〕において認めたことが、やが

て注目されるだろう。》（訳は筆者による）

引用していて、“literature in Romanized Japanese”（ローマ字化された日本語の文書）、“to the five vowels as well as to the syllables KA, NA, MA, TA, SA, etc.”（KA, NA, MA, TA, SA などの音節だけでなく五つの母音に）、“the signs for forty-eight syllables and vowels”（48個の音節と母音の点字）など、意味の分かりにくところもあるが、そのまま記しておく（第1版に従えば、母音も含めて48個の音節としていると思う）。

パリにおいて開催された世界点字統一会議についての記事を引用しておく。

《同年[1950]、パリにおいて世界点字統一会議が開かれたが、日本の点字をローマ字システムにすべきではないかというインド代表の発言があった。これに対し、日本代表中村京太郎（1880～1961）は、かな文字の特殊性と合理性を強調した。これについて、マッケンジーは「日本語の点字は単純で、実用的な音節的基礎のうえになりたち、これによる多数の出版物が現存するので、特別にそのまま受け入れることにした」と裁定している。その後“World Braille Usage”を刊行し、その普及に努めた。》（世界盲人百科事典編集委員会編『世界盲人百科事典』日本ライトハウス、1972、p. 58、鳥居篤治郎執筆「世界点字協議会」の項）〔筆者注：中村の没年は1964の誤記であろう〕

当時は「点字をローマ字システムに」していない有力な言語は、日本語以外にあまりなかったのでやり玉に挙げられたのであろう。

“World Braille Usage”中の、“that the main Unesco conference on Braille recognized”（主要なユネスコの会議において認めたこと）とは、マッケンジーの「裁定」を指すものと思われる。マッケンジー（Clutha Nantes Mackenzie, 1895–1966）は、ニュージーランド出身で、世界点字協議会（the World Braille Council）会長、“World Braille Usage”第1版の著者である。

日本語点字は次のように紹介されている（p. 115）。

JAPANESE BRAILLE

Received from the Lighthouse Institution, Osaka City, Japan

⠁	ア a	⠇	イ i	⠥	ウ u	⠸	エ e	⠏	オ o
⠉	カ ka	⠊	キ ki	⠦	ク ku	⠴	ケ ke	⠎	コ ko

サ sa	シ shi	ス su	セ se	ソ so
タ ta	チ chi	ツ tsu	テ te	ト to
ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no
ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho
マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo
ヤ ya		ユ yu		ヨ yo
ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro
ワ wa	ヰ wi		ヱ we	ヲ wo
n (nasal sound)				

Punctuation marks: These follow the general international pattern.

Numeral sign & numbers: These are also the internationally established signs.

解説：日本語点字の資料提供は、大阪のライトハウスである。50音のみの掲載で、濁音、半濁音などの紹介はない。句読符号が国際的なものと同じだという表現も正確ではない。

第2版。書名・World Braille Usage、著者・UNESCO, by National Library Service for the Blind and Physically Handicapped, Library of Congress、収録言語数・97、出版社・Paris UNESCO、出版年・1990、ページ数・124。

参照 URL ・ <http://unesdoc.unesco.org/images/0008/000872/087242eb.pdf>

日本語点字は次のように紹介されている (pp. 46~47) 。

Japan

Language: Japanese

Received from:

Japan Braille Committee

c/o Japan Braille Library

1-23-4, Takadanobaba, 1-Chome

Shinjuku-ku

Tokyo

Literary notation:

Japan Braille Committee. *Revised Japanese Braille Notation*. Tokyo: Japan Braille Committee, 1980

Mathematics notation:

Japan Braille Committee. *Explanation of Braille Mathematics Symbols*. Tokyo: Japan Braille Committee, 1981

Science notation:

Japan Braille Committee. *Explanation of Braille Science Symbols*. Tokyo: Japan Braille Committee, 1983

Music notation:

Spanner, H. V. *Revised International Manual of Braille Notation*, 1956

Special notation is used for Japanese traditional music.

Computer notation:

Japan Braille Committee. *Braille Code for Computer Notation*. Tokyo: Japan Braille Committee, 1981

Braille standards set by:
Japan Braille Committee

Syllabary sets:

あ a	い i	う u	え e	お o
か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
さ sa	し shi	す su	せ se	そ so
た ta	ち chi	つ tsu	て te	と to
な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no
は ha	ひ hi	ふ hu	へ he	ほ ho
ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
や ya		ゆ yu		よ yo
ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
わ wa	ゐ wi		ゑ we	を wo
ん n (nasal sound)				

Punctuation:

capital sign	exclamation	dash
accent sign	comma	ellipsis
primary stress (accent sign)	parentheses (open and close)	first quote
secondary stress (accent sign)	hyphen	second quote
period	colon	inner quote
question mark		

解説：2版以降は解説する言語数を多くすることに意を用いたらしく、点字の歴史のような解説記事はない。日本語点字の資料提供は日本点字委員会。一般文書の表記は『改訂日本点字表記法』（1980）による。表記の基準は日本点字委員会によって定められていることが示されている。本版においても、文字は50音のみの紹介である。スペースに制限のあったものか。前著に比べて句読符は詳しくなっているが、「句点」などに誤記があり、日本語のものと英語のものが混乱しているように見える。

第3版。書名・World Braille Usage, Third Edition、著者・Perkins, by International Council on English Braille, by National Library Service for the Blind and Physically Handicapped, Library of Congress、収録言語数・142カ国 133言語、出版社・Paris UNESCO、出版年・2013、ページ数・16p+210p。

参照 URL・<http://www.perkins.org/assets/downloads/worldbrailleusage/world-braille-usage-third-edition.pdf>

日本語点字は次のように紹介されている（p. 77およびpp. 191～192）。

Japan

Language: Japanese (uncontracted)

Braille Standards Set by:

The Braille Authority of Japan

<http://www.braille.jp>

Literary Notation:

Japanese Braille Notation, 1990

Mathematics Notation:

Braille Mathematics Notation, 1981

Science Notation:

Braille Science Notation, 1983

Computer Notation:

Japanese Braille Code for Computer, 1981

Music Notation:

Japanese Braille Code for Music, 1965

Japanese Alphabet: See Japanese, page 191

Japanese

Primary language transcribed: Japan

Secondary language transcribed: Taiwan

Alphabet: Japanese

あ a (1)	⠁	い I (12)	⠇	う u (14)	⠥	え e (124)	⠑	お o (24)	⠝
か ka(16)	⠁	き ki(126)	⠇	く ku(146)	⠥	け ke(1246)	⠑	こ ko(246)	⠝
さ sa(156)	⠁	し shi(1256)	⠇	す su(1456)	⠥	せ se(12456)	⠑	そ so(2456)	⠝
た ta(135)	⠁	ち chi(1235)	⠇	つ tsu(1345)	⠥	て te(12345)	⠑	と to(2345)	⠝
な na(13)	⠁	に ni(123)	⠇	ぬ nu(134)	⠥	ね ne(1234)	⠑	の no(234)	⠝
は ha(136)	⠁	ひ hi(1236)	⠇	ふ hu(1346)	⠥	へ he(12346)	⠑	ほ ho(2346)	⠝
ま ma(1356)	⠁	み mi(12356)	⠇	む mu(13456)	⠥	め me(123456)	⠑	も mo(23456)	⠝
や ya(34)	⠁			ゆ yu(346)	⠥			よ yo(345)	⠝
ら ra(15)	⠁	り ri(125)	⠇	る ru(145)	⠥	れ re(1245)	⠑	ろ ro(245)	⠝
わ wa(3)	⠁	ゐ wi(23)	⠇			ゑ we(235)	⠑	を wo(35)	⠝
ん n(356)	⠁	っ small tsu(soku-on) (2)	⠇			ー vowel lengthening(cho-on) (25)	⠑		⠝

が ga(5, 16) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぎ gi(5, 126) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぐ gu(5, 146) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ げ ge(5, 1246) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ごと go(5, 246) ☺☺ ☺☺
 ざ za(5, 156) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ じ ji(5, 1256) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ず zu(5, 1456) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぜ ze(5, 12456) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぞ zo(5, 2456) ☺☺ ☺☺
 だ da(5, 135) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぢ ji(5, 1235) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ づ zu(5, 1345) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ で de(5, 12345) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ども do(5, 2345) ☺☺ ☺☺
 ば ba(5, 136) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ び bi(5, 1236) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぶ bu(5, 1346) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ べ be(5, 12346) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぼ bo(5, 2346) ☺☺ ☺☺
 ぱ pa(6, 136) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぴ pi(6, 1236) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぷ pu(6, 1346) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぺ pe(6, 12346) ☺☺ ☺ ☺ ☺ ☺ ぽ po(6, 2346) ☺☺ ☺☺

Alphabet

きゃ kya (4, 16) ☺☺☺	きゅ kyu (4, 146) ☺☺☺	きょ kyo (4, 246) ☺☺☺
しゃ sha (4, 156) ☺☺☺	しゅ shu (4, 1456) ☺☺☺	しょ sho (4, 2456) ☺☺☺
ちゃ cha (4, 135) ☺☺☺	ちゅ chu (4, 1345) ☺☺☺	ちょ cho (4, 2345) ☺☺☺
にゃ nya (4, 13) ☺☺☺	にゅ nyu (4, 134) ☺☺☺	にょ nyo (4, 234) ☺☺☺
ひゃ hya (4, 136) ☺☺☺	ひゅ hyu (4, 1346) ☺☺☺	ひょ hyo (4, 2346) ☺☺☺
みゃ mya (4, 1356) ☺☺☺	みゅ my (4, 13456) ☺☺☺	みょ myo (4, 23456) ☺☺☺
りゃ rya (4, 15) ☺☺☺	りゅ ryu (4, 145) ☺☺☺	りょ ryo (4, 245) ☺☺☺
ぎゃ gya (45, 16) ☺☺☺	ぎゅ gyu (45, 146) ☺☺☺	ぎょ gyo (45, 246) ☺☺☺
じゃ ja (45, 156) ☺☺☺	じゅ ju (45, 1456) ☺☺☺	じょ jo (45, 2456) ☺☺☺
ぢゃ ja (45, 135) ☺☺☺	ぢゅ ju (45, 1345) ☺☺☺	ぢょ jo (45, 2345) ☺☺☺
びゃ bya (45, 136) ☺☺☺	びゅ byu (45, 1346) ☺☺☺	びょ byo (45, 2346) ☺☺☺
ぴゃ pya (46, 136) ☺☺☺	ぴゅ pyu (46, 1346) ☺☺☺	ぴょ pyo (46, 2346) ☺☺☺

Punctuation

、 comma	(56)	☺☺
。 full stop	(256)	☺☺☺
? question mark	(26)	☺☺
! exclamation	(235)	☺☺
(...) parentheses	(2356... 2356)	☺☺... ☺☺
「...」 quote	(36... 36)	☺☺... ☺☺
— bar line	(25, 25)	☺☺☺☺
～ wave dash	(36, 36)	☺☺☺☺
... ellipsis	(2, 2, 2)	☺☺☺☺☺☺
number sign	(3456)	☺☺☺☺

解説：日本語点字資料提供者・日本点字委員会。一般文書の表記は『日本点字表記法1990年版』によることになっている。初めて50音のほかに、促音符、長音符、濁音、半濁音、拗音、拗濁音、拗半濁音が掲載された。句読符号の表記も正確である。

「日本点字委員会」の英訳が第2版と異なっているが、第2版発行後に“The Braille Authority of Japan”とする旨、日点委総会において決定された。

下記の諸点は編集ミスであると思われる。

Secondary language transcribed: Taiwan → この行削除

い I (12) → い i (12)

みゆ my (4, 13456) → みゆ myu (4, 13456)

“World Braille Usage”には、各国点字の用法（日本語でいえば、分かち書き、切れ続き、句読符号の用法など）まで掲載されているわけではない。しかし各国語の文字と句読点が網羅的に記されており、世界各国の点字を比較できるという点で、関係者には大いに役立つ資料だと思う。

第2版、第3版の日本語点字の資料提供者は日本点字委員会である。日点委の働きを紹介する意味もあって、本稿を執筆した。

日本語を解しない外国の編集者に、日本語点字の資料を送付し、校正するという困難な仕事に携わられた代々の担当者の方々に感謝申し上げたい。

『闇を照らす六つの星 — 日本点字の父石川倉次』の紹介

点字の翻案者、石川倉次（1859～1944）の伝記を1冊紹介します。小倉明著『闇を照らす六つの星 — 日本点字の父石川倉次』です。

目次を紹介します。

プロローグ／1. 誕生そして上総国（千葉県）へ／2. 新聞記者か教員か／3. 三度の誘い／4. 熱い心／5. 「ブライユ点字」がやって来た／6. 日本にも点字を／7. 「八」と「六」の迷い／8. 六点は不可能か／9. 「点字は目である」／10. 白熱の選定会／11. 点字の普及のために／12. その後の倉次／13. 六星照道／14. 点字のこれから／インタビュー：阿佐博氏に聞く。

内容を簡単に見てみましょう。

廃藩置県により、父は武士の身分と収入を失い、病弱な母を残して千葉県各地を転々とします（1. 誕生そして上総国（千葉県）へ）。

倉次は教員としての自分に飽きたらず、上京して新聞記者になろうとしますが、また教員を続けます（2. 新聞記者か教員か）。若者はいつの時代も、自分の将来を「これでいいのか」と悩みますが、倉次とて同じでした。

訓盲啞院こにしのおはちの小西信八から、「本校に赴任してほしい」という手紙を3度も受け取ります（3. 三度の誘い）。「石川君は将来何かやってくれる人だ」と小西は見抜いたのでしょう。

点字翻案を始めた倉次は、長い間、8点点字の研究にとどまっていた。48文字の仮名は6点では表せないと考えたのです。しかしついに6点で仮名を表すことに成功します（7. 「八」と「六」の迷い／8. 六点は不可能か）。出来上がったものを見ると「ああそうか」と思えることも、人に先駆けて始めるのは大変なことが分かります。

六つの点がすべて打たれた形を何度も見続けるうちに、「目」の字に見えてきました。それ以来、「点字は盲人の目なり」と考えるようになりました。次女に点字を意味する「ポイント」と名付けようかと考えるほど、点字の研究に没頭しました（9. 点字は目である）。ちなみに次女は、「とみ」と名付けられました。

選定会において、教師と生徒の枠を越えて白熱した議論と真剣な研鑽が行われまし

たが、それが点字が生まれる背景だと知ることができます。1890（明23）年11月1日、第4回選定会において石川案が採用されたのですが、これが決定するまでに考えられた他の点字案もこの成立に貢献していることを、倉次は忘れませんでした（10. 白熱の選定会）。

「六つの星、つまり点字が道を照らす」ということを、倉次は「六星照道」という言葉にして残しています（13. 六星照道）。倉次の人生は、生涯、この六つの星に道を照らされ、導かれてきたものでした。書名の『闇を照らす六つの星』は、この言葉に由来していると思われます。

点字を学習や仕事に活用するため、新しい機器も次々に開発されてきました（14. 点字のこれから）。

インタビューにおいて阿佐博氏は、《石川氏は大変きさくな、おだやかな人だという印象を受けました》と語っています（阿佐博氏に聞く）。倉次と直接会った人が少なくなりつつある昨今、このインタビューは貴重な記録です。

小倉さんは以前、千葉県文書館に勤務していました。文書館には倉次の60年にわたる日記をはじめ、資料がたくさん保管されていることに気付き、そうした資料も活用して子供たちにもわかるように、やさしい言葉で書き上げようと考えたそうです。倉次の生涯をたどりながら、日本で点字がどのように考えられ、広がっていったのが、わかりやすく書かれています。小倉さんが素晴らしい伝記を書かれたのは、やはり物語作家としての下地があって、倉次の心を小倉流に創作したのではないかと思います。小学校中学年から読める一冊です。

日本点字委員会からは、原田早苗氏（筑波大学附属視覚特別支援学校）、阿佐博氏（日点委顧問）、田中徹二氏（日本点字図書館）が執筆に協力しています。

墨字版：ちようぶんしや 汐文社、2012年12月発行。1,470円。

点字版：日本点字図書館点字製作課、2013年6月発行。全1巻、1,800円。

（文責・金子 昭）

日本点字委員会第49回総会並びに研究協議会報告

2013年6月1日（土）～6月2日（日）、日本ライトハウス情報文化センターにおいて第49回総会並びに研究協議会が行われた。委員17名、事務局員3名、会友5名、オブザーバー等27名、計52名の出席があった。

総会

2012年度事業・決算報告、各地域委員会報告、世界点字協議会（WBC）に関する報告、2013年度事業計画・予算案などが討議され承認された。

研究協議

1. 昨年の総会において東海点字研究会より「カッコ類の切れ続きと、数を含む語の書き表し方について」が提案された。下記のような趣旨であった。

①カッコ類の切れ続きについて。《ショーネン□
16サイノ□スガタ [少年(16歳)の姿]》《オー□センシュワ□
コトシワ□ホームランヲ□
50ポン□ウツ□
ト□イッテ□イル□ [王選手は「今年は(ホームランを)50本打つ」と言っている。]》のように、カッコの中が直前の語句の説明であるかないかを問わず、開きカッコの前はマスをあける。

②数を含む語の書き表し方。およその数のときは数符をはさんで続けて書くが、それ以外でも、《ウンメイノ□
1 3 ガクショー [「運命」の一、三楽章]》《ソーシャ□
1 3 ルイ [走者1・3塁]》のように続けて書きたい場合もある。

この提案を受けて各地域委員会において検討した結果が報告された。②については、東海点字研究会より「数を含む読点や中点の省略について」の追加提案があり、引き続き検討することとした。

2. 近畿点字研究会より「外文字の使用範囲拡大に向けた検討と提案」が行われた。引き続き、外文字、外国語引用符について検討していくこととした。

3. 「日本点字表記法」検討委員会より経過報告が行われた。同委員会では「表記法」に何らかの課題がないかを検討しており、検討を終えた時点で総会に諮る予定である。

4. 「医学用語の点字表記について」に対する問題提起。下記の趣旨から問題提起が行われ、討議を行った。

①同資料が答申されてから2年経過し、現時点の専門分野（国家試験と教科書等）

での反映の状況を再度確認したい。

②ホームページダウンロード数が多いことから、本資料作成の経緯を知る機会のない人々に「表記法」との関連性が理解されないまま使われているおそれがあり、本資料の目的、基本方針、作成の経過などを加えて独立した資料としての体裁を整えたい。

③本資料には見直しや修正が必要と思われるところがあるので、その箇所を明らかにしたい。日点委として協議を重ね、よりよい資料として共有できるようにしたい。

専門分野での反映の状況について次のとおり報告された。

①今年2月に行われた第21回国家試験は、おおむね、『日本点字表記法 2001年版』、および本資料に準拠した点字表記であった。

②点字教科書を出版している出版社は、教科書の改訂期などに本資料に添うように作業を進めている。

問題提起を受け、本資料の内容検討はすぐには行わず、各地域委員会、および研究協議会において研究を継続することとした。

5. 筑波大学附属視覚特別支援学校入試点訳研究会より「平成25年度大学入試センター試験の点訳について ― 入学試験問題におけるレイアウトと点字表記」について報告が行われた。1. 全般的な問題、①注、②ページ行表示、③選択肢のレイアウト、2. 各教科における問題点、①国語、②社会、③数学、の諸点から課題が報告された。

6. 「UEB（統一英語点字）の日本での対応について」。

下記の報告、および討議が行われた。

①事務局より英語圏におけるUEBの動きについて紹介があった。

②日本で採用する場合について、記号類を中心に危惧する意見があった。

③日本で採用する場合、外国語引用符の中での扱いについて意見があった。

④諸外国の動向についてさらに情報を収集し、日本で取り入れることになった場合の課題について検討を続ける。

編集後記

「日本の点字」第38号をお届けいたします。

当山啓さんの巻頭言「思い出は点字とともに」は、長い間点字にかかわってきた当山さんの個人史として、興味深く読みました。点字に生きることは、点字を愛することなのだ、という当山さんの思いが伝わってきます。

2012（平成24）年12月10日に逝去された小林一弘さんを偲んで特集を組みました。木塚泰弘さんは、学生時代から60年近くにわたり親交を結んでこられた立場から、塩谷治さんは、元職場の同僚の立場から、小林秀之さんはご家族の立場から、小林さんについて書いてくださいました。読者の中で小林さんをご存じの方は、それぞれの形で「小林さんの思い出」をお持ちのことと思います。

私事にわたりますが、筆者は1964（昭和39）年の秋、東京教育大学で視覚障害児の言語特性について卒業論文を書いていました。その資料収集のために、卒論を指導してくださっていた佐藤泰正教授やすまさのご紹介で、都内の盲学校を訪問していました。葛飾盲学校にもおじゃまし、当時同盲学校に勤めていた小林さんにお会いしました。東京オリンピック直後で、その興奮の余韻がまだ東京中にみなぎっている頃でした。佐藤教授は、「小林君は君の優秀な先輩だよ」と言って送り出してくださいました。小林さんの計らいで、生徒たちにインタビューさせてもらいました。それが筆者と小林さんの出会いでした。それ以来、視覚障害教育の面でも点字研究の面でも、小林さんの後ろ姿をはるか後方から見失わないように、今日まで歩き続けてきた思いがします。小林さんのご冥福をお祈りします。

日本点字委員会とかかわりの深い二つの会から原稿をいただき、本号を飾ることができました。「10周年を迎えた日本点字技能師協会に思う」（日本点字技能師協会理事長・中山敬さん）と、「点字を指で読む人、目で読む人を増やしたい～日本点字普及協会の取り組み～」（日本点字普及協会副理事長・藤野克己さん）です。技能師協会、普及協会には、日本点字委員会の今後の歩みの中で、ご指導、お交わりをいただくことがあろうかと思えます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

「“World Braille Usage”（世界点字便覧）に日本語点字はどのように紹介されてきたか」（金子昭）は、日本の点字がどのように海外に紹介されてきたかを、日点委の働きの一端を紹介することも併せて書いてみました。おついでに折にご高覧いただけ

れば幸いです。

2013年11月1日は、日本点字制定123年目の記念日でした。全国でさまざまな記念の行事が行われたことと思います。日本点字制定100周年の記念事業を行ったのが、つい昨日のように思い出されます。それ以来、点字を読み書きする人たちの状況、点字を取り巻くテクノロジーの環境も大きな変革を遂げてきました。時代がどのように流れようと、視覚障害者の文字である点字を守り、はぐくみ、次の世代につなげていきたいものと思います。

最後に身内のことですが、日点委の一つの情報として記したいと思います。2013年のヘレンケラー・サリバン賞は日点委の当山啓事務局長が受賞しました。日点委事務局長として長年努めてきたことなどに対して贈られたものです。同賞は視覚障害者の福祉・教育・文化・スポーツなどの分野において、視覚障害者を支援している晴眼者に、東京ヘレン・ケラー協会より贈られるものです。

(金子 昭)

日 本 の 点 字 第38号

2014年 2 月22日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

印刷所 コロニー印刷

〒162-0034 東京都中野区江原町2-6-7
